

点から線へとつながっていく 葬儀業を目指して

取材・文 編集部

葬儀ばかりでなく、遺族同士での日帰り旅行を企画するなど、遺族の悲しみに寄り添う経営を貫く株式会社
オームラ（福井市）。その方針に至った道筋には、耐え難い悲しみと静かな決意があった。

**がんと闘いながらも
会社に尽くした亡き夫**

本社に隣接する葬儀会場「西木田合掌会館」。その三階は葬儀ではなく、法事専用のホールである。えんじ色を基調にした広い部屋に、いくつも円卓が並び、静かに音楽が流れている。

法事を済ませた後、会場を移さずに落ち着いた雰囲気の中で会食ができる。足の不自由なお年寄りなどにとって、とても優しい配慮である。

「これも亡くなった夫の構想なんです。部屋の色はえんじがいいな、暗いイメージを払拭（はらき）して明るい会場を造ろうよ……って。病院のベッドで本当にいろいろな話をしました」



株式会社オームラ
常務取締役

おおむら ようこ
大村洋子

大村洋子常務は、そう話す。

代々葬儀業を営んできたオームラの三代目社長だった夫の修一さんが亡くなったのは、二〇〇九（平成21）年のことである。

その二年前の夏。胃がんの宣告を受けた。すでにがんは手のひらほどになつていた。検査から帰ってくると、修一さんは本社の三階に幹部社員を呼び淡々とそのことを告げた。

あまりに突然のことに、夫の話を聞きながら大村常務は膝から床に崩れ落ちたという。

修一さんは治療に専念する一方、入院すれば病室に幹部を呼び、退院するといったものように出社した。大村常務も毎日、夫にさまざまな報告をし、指示をもらっていた。



相談窓口「ココロ」は法事や仏事なども含めたあらゆるお困りごとに対応している。そのところは、「点から線へとつながっていく葬儀業」という思いがある

「最後には小枝のように瘦せて、歩けなくなつても会社のことを気にかけていました」

最後の最後まで残された者のためを考え、家族の財産分与や自分の葬儀の段取りまで具体的に決めていた。さらに、夫のパソコンには、何年には定年で何人が辞めるから採用をするように、何年には合掌会館を改装したいなど、自社の人事構想や将来構想が

描かれていたそうだ。

常務の洋子さんが嫁いできたのは、一九八五(昭和60)年のことである。創業者である祖父の甫さんも健在だった。三人の子を産み育て、末っ子で長男の直央さんが小学校に入学した年に、自分も入社し事務の仕事をするようになった。

それから約一〇年が過ぎていた。夫の死後は、会長だった父・一男さんに

再び社長に就いてもらい、実質的な経営は洋子さんが担うという形で新しいスタートを切った。

夫の敷いたレールに乗ったままでいいのか

オームラは、早くからグリーンケア(悲嘆からの回復)の考え方を導入するなど、常に新しい葬儀の形を模索し

続けていた。

とりわけ三代目の修一さんにはその思いが強く、顧客第一を掲げて、理念をつくり、組織の改革も進めていたのである。

これからは葬儀のお手伝いだけではなく、事前や事後の相談にも関わり、お客様に心から頼られる存在になる。点で終わるのではなく線のようにつながっていく企業にしたい。というのが、修一さんの願いだった。

大村常務は、夫のビジョンを実現させようと懸命に会社のかじ取りを始めた。しかし、なかなか思ったようには会社は動かない。社員たちとの人間関係で悩むことも多かった。

「みんなが聞いてくるすべてのことに私が意思決定をしなければいけないのですが、周りへの配慮で右往左往して決め切れないときもありました。まだ経営者としての信念がなかったんですね」

大村常務は、夫が亡くなって一年が過ぎた頃から急に深い悲しみの感情が押し寄せるようになった、と話す。

「強い後悔とか、孤独感とか、自分に対する怒りとか、そういう感情が一時

「送る心」を「感謝の心」と「奉仕の心」で お手伝いさせていただくことで地域社会に貢献します

丁度良いサービスとプラスαの感動

1. 常に最高の状態でお客様を迎える
2. 常に“気の効いたサービス”を心がける
3. 常に向上心を持ち続ける
4. 常に社員としての自覚を持った行動を心がける(社内、社外共に)
5. 常に奉仕の心で接する

夫である大村修一氏が遺した「企業理念と5つの社訓」。「心」という言葉が7つ使われている

大村常務には、この言葉は、まさに自分に向かつて言われているものだとし
か思えなかった。「ものすごい衝撃でした。私は夫のレ

地域の経営者と知り合う中で、大村常務は朝礼の大切さを知った。ぜひ自社でもやろうと決めた。「朝礼では理念も唱和するんですね。私、そのときオームラにも理念があったことを改めて思い出しました」
修一さんがつくっていた、「企業理念と5つの社訓」(別掲)だ。「その中には「心」という言葉が七つ

も入っていたのです。夫が理念に込めた「心」とは何か、それを考えながら朝礼と向き合いました」
当初は仕方なく参加している社員が多かったという。冷たい視線の中、朝礼を進めた。膝が震え、声はひっくり返り、頭が真っ白になった。「でも、私は笑顔でやる。大きな声でやる。笑顔は人を変えるんや、とそれを信じてやり続けたのです」

必ず変わると信じて 笑顔で続けた朝礼

た。これが大きな転機になった。北海道でのセミナーに、名古屋の葬儀社で修業をしている長男を誘って参加したときのことだ。ある会社の社長が長男に言った。「君が修業から帰ってきたとき、先代の敷いたレールの上で先代と仲良く肩組んで歩いているようでは、親の仕事を手伝っているだけだ。一代世代が替わるということ
は、それは大きな感覚、価値観が変わるということだ。自分のやりたいこと、自分がどうしたいのか、どうやるのかを見つけて、そのときは先代、このお母さんとかんかをしなさい……」
確かに夫を亡くした自分はいかに
そんな存在かもしれない。だが、社長を亡くした社員たちも大きな不安を抱えているに違いない。そのことに自分は思いを致すことができなかった……。大村常務は深く恥じた。
こうして、自分を変え、会社を変えるために、常務は地域の経営者の集まりに参加し、経営の勉強をするようになった。



社風が変わるきっかけとなった朝礼の風景。毎朝のコミュニケーションの積み重ねが、社員一人ひとりの意識を変えていった

に高まったのです。一年たっても愛する者を失った悲しみから人は立ち直れない、ということを知りました。それまで葬儀の仕事に携わってきたのに、そんなことも私はわからなかったのです」
夫が話していたグリーンケアの大切さを身をもって知った。そのことについて自分も真剣に学ぼうと決意し

た。これが大きな転機になった。北海道でのセミナーに、名古屋の葬儀社で修業をしている長男を誘って参加したときのことだ。ある会社の社長が長男に言った。「君が修業から帰ってきたとき、先代の敷いたレールの上で先代と仲良く肩組んで歩いているようでは、親の仕事を手伝っているだけだ。一代世代が替わるということ
は、それは大きな感覚、価値観が変わるということだ。自分のやりたいこと、自分がどうしたいのか、どうやるのかを見つけて、そのときは先代、このお母さんとかんかをしなさい……」

た。これが大きな転機になった。北海道でのセミナーに、名古屋の葬儀社で修業をしている長男を誘って参加したときのことだ。ある会社の社長が長男に言った。「君が修業から帰ってきたとき、先代の敷いたレールの上で先代と仲良く肩組んで歩いているようでは、親の仕事を手伝っているだけだ。一代世代が替わるということ
は、それは大きな感覚、価値観が変わるということだ。自分のやりたいこと、自分がどうしたいのか、どうやるのかを見つけて、そのときは先代、このお母さんとかんかをしなさい……」

た。これが大きな転機になった。北海道でのセミナーに、名古屋の葬儀社で修業をしている長男を誘って参加したときのことだ。ある会社の社長が長男に言った。「君が修業から帰ってきたとき、先代の敷いたレールの上で先代と仲良く肩組んで歩いているようでは、親の仕事を手伝っているだけだ。一代世代が替わるということ
は、それは大きな感覚、価値観が変わるということだ。自分のやりたいこと、自分がどうしたいのか、どうやるのかを見つけて、そのときは先代、このお母さんとかんかをしなさい……」

理念を一緒に唱和し、今日やることを発表し、昨日の気づきを語り……。毎日朝礼を重ねていくことで、会社がどんどん変わっていった。

「なにより笑顔が多くなりました。いまでは朝礼の三分くらい前になると、みんながわれ先に並び始めます。一人ひとりの顔を見ていると、あの子、調子悪そうだなとメンタルもわかります。すると必ず朝礼後に声をかけます。以前の私は、自分のことで精いっぱい、そういうことにまったく気づきませんでした」

給与計算をしても、この子、今月は頑張ったな、と社員の様子が浮かぶ。感謝の気持ちから給与明細を手渡しすることにした。さらには面談して渡すようになり、最初は一〇分ほどの面談が、いまでは一人一時間かかるようになった。

一人ひとりに光を当ててくる社風に近づいた。経営を引き継いだ八年前とはまったく雰囲気が変わり、社員のみんなが率先して動き、さまざまな提案をするようになった。イベントのPOP

や飾り付けなど、工夫を凝らし手作りしてくれる。まさに社訓にある「ブラスラの感動」の実践だ。

大村常務は朝礼で、よく「ウサギとカメ」の話をするそう。どうしてウサギはカメに負けたのか。「ウサギは後ろのカメばかり見ていたのだと思う。カメはゴールだけを見ていたのに違くない。私たちも、一步一步いいから昨日よりもよくなるように常に先を見ていこうよ」

いつも、そう話を締めくくる。



いまオームラには、3人の子ともたちも入社して、会社を支えている。左は長女の有加さん、中央は長男の直央さん、次女の真愛さんは産休中。

人の役に立った分だけ信頼が返ってくる

大村常務がみんなで見つめようとしている「先」、すなわちゴールは、点から線へとつながっていく葬儀業にという修一さんの思いだ。

そのための新たな試みとして、昨年九月、相談窓口「こころ」をオープンした。葬儀の事前相談はもちろん、法事のことや仏事にまつわるどんな困りごとにも相談に応じる。このときも社員たちが積極的にアイデアを出してくれ、相談窓口はカフェのような空間になった。

ろうそくやお線香、数珠なども置こう。仏壇もあるといいね。でも大きいのは置けない。なら小さな仏壇を置こうよ。どうせなら、たくさん並べよう……。そんな話から、小さな仏壇の品揃え地域ナンバーワンという特徴も加わった。

毎年一回、オームラでは葬儀をされたご遺族たちと日帰り旅行を催している。これも修一さんがやり始め、今年で一年目になる。

「去年は姫路城、今年は立山アルペン

ルートの雪の大谷に行きました。目的はグリーンフからの正しい立ち直りをしていただくこと。旅行を楽しみながら、愛する者を失った者同士、お互いに悲しみに寄り添い、癒やし、励まし合おうというのが趣旨です。参加者も年々増えて今年は三八〇人になりました」

このころよく、大村常務は、「洋子さん、葬儀屋はなあ、心のええ人でないと皆さんのや」といつていた、祖父の言葉を思い出そう。

昭和元(1926)年、わずか一五歳で創業した祖父はよく、初めて仕事をしたときの話を聞かせてくれた。最初は心配そうに仕事ぶりを見ていた喪主が、懸命に仕事をやり切ったとき「ありがたう。坊(ぼや)これからも頑張れや」と言ってくれた。「このありがたうと、頑張れやが、いまのオームラをつくったんや」と。

大村常務は、「祖父は、人の役に立つた分だけ、信頼が返ってくると言いたかったんだと思います」と話す。その思いに、修一さんが理念に込めた「心」の願いを解くカギもあるに違いない。

会社概要

設立 1962年 業種 葬儀業 資本金 1080万円 本社所在地 福井県福井市
従業員数 30名 ホームページ <http://ok-oomura.co.jp/>

写真提供 株式会社オームラ